

平成27年度第3回松江市総合教育会議 会議録

日 時：平成27年11月2日（月） 10：00～

場 所：第2常任委員会室

出席者：【市長】 松浦市長

【教育委員会】 清水教育長、櫻井委員、布野委員、伊藤委員、多々納委員

【事務局】 星野政策部長、須山政策部次長、広江副教育長、岩田副教育長、
小塚教育委員会次長、錦織教育総務課総務係長、

欠席者：なし

【1 市長あいさつ】

○松浦市長

これから第3回の総合教育会議を開催します。今日のテーマは、「地方創生」ということです。

先月の末に総合戦略を決定しました。人口減少社会にどのように対応していくかということですが、地方創生のポイントはいくつかあります。まず、総合計画との関係で申しますと、総合計画は行政が作ってそれを実施していくとスタイルのものであり、5年とか10年のスパンで考えていくものです。これに対し、地方創生は大変長い時間がかかるものでして、2060年を目標年次としています。

もう一つは、行政がこういったものを策定し実施していくということでは実現が不可能です。人口減少は、行政分野だけではなくいろいろな分野にまたがっています。従って、市民の生活意識にも関係していますので、私たちは市民挙げてこの問題に取り組んでいく必要があります。そのためにはまず、人口減少になったらどういう問題が出てくるのかという危機意識を皆で共有していく必要があると思っています。

例えば50年前60年前の状況で、皆さんの家族は何人で生活していたかということを考えていただくと、大体7～8人、多い人は10人以上の大所帯であったと思います。しかも三世同居というような状況がありましたが、今の時点でそれを考えてみますと、多分ご夫婦2人とかあるいは1人だけというように大変少なくなっている状況があり、それだけ見ても人口減少ということを実感していただけるのではないかと思います。従って、このまま進むと自分たちの家庭は無くなってしまおうということになりかねないわ

けですので、どのような形でこれから繋いでいくのかということがまさに人口減少対策ということになっていくと思います。そういう意味で危機意識を皆さん方と共有していく必要があると思っていますので、いろんところで市民の皆さんに訴えかけ、市民運動としてこれをやっていかなければなりません。行政だけがやっているということではなく、民間の方とかいろんな皆さん方とこの意識を共有しながら実施をし、市民運動として盛り上げていきたいと思っています。

それからもう一つは、同じことですが、行政がいろんなものを組み立てて実施をしていくということではなくて、いろんな分野の皆さん方から提案をいただいて、それを一緒になって実現していく。目的は人口減少の対策ということ一つですので、入口はいろんな事業がありますが、中に入ってみるとやろうとしていることは同じであったり、一緒になって実施をしていくことが考えられます。危機意識をまず共有して、そして市民の皆さん方と共創の考え方で実施していく。いわゆる市民運動としてこれをやっていきたいと思っています。

特に人口減少については教育の問題が大きく関わっていることだと思っています。今日もそれをテーマに、どのようにしたらよいだらうかということを考えていただくことになると思います。特に、学校教育はもちろんですが、やはり家庭の中での教育というものが大きいのではないかと。例えば、子どもをずっと育て上げて、大学へ進学するか就職をするといったときに、都会に出て幸せな人生を送ってほしいという気持ちで見送るわけですが、このことが果たして両方にとって本当に幸せな人生になるのか、結局そういうことが繰り返されることによって人口減少が加速をしていくという状況があるわけです。その仕組みについては後でご説明をさせていただきますが、その根本にはやはり家庭の中の幸せといえますか、子どもの人生、あるいは自分の人生において、幸せをどこに求めるのかということを考えていかなければなりません。そういうことを学校教育の中でもどういう形で反映させていくかというような問題もあろうかと思っています。

今日は限られた時間で大変大きな課題ではございますが、地方創生のために教育としてはどういうことができるのか皆様方と一緒に考えさせていただきたいと思っていますので、よろしくをお願いします。

【2 意見交換：地方創生と教育について】

○松浦市長

それでは、地方創生を推進するために教育が果たす役割についてご議論いただきたい
と思います。まず事務局から説明をお願いします。

○須山政策部次長

先般、10月21日の教育委員会会議で「松江市まち・ひと・しごと創生 人口ビジョン・第1次総合戦略」について簡単に説明させていただきました。その時に本書をお渡ししましたので、予めご覧いただいていると思いますが、概要をお話しさせていただきます。説明させていただいた時点では、総合戦略に「(案)」がついていましたが、先月末をもって策定いたしまして、「(案)」が消えています。

本日は、概要版をお配りしています。先週のところで市役所の全職員に対し、人口ビジョンと第1次総合戦略について研修を実施いたしましたが、その時に使用した資料です。これを使って簡単に説明させていただきます。

資料を捲っていただきますと、日本の人口の見通し、出生の関係、人口移動の状況のグラフをつけています。出生数がどんどん下がってきていることや、人口移動の状況では、東京圏への人口移動が出てきて地方は人口流出の状況にあるというようなグラフを載せています。そして3ページ目の下の松江市の総人口の推移のところで、平成15年を人口のピークとして、その後ずっと下がり続けているというグラフを載せています。ページを捲っていただきますと、松江市の年齢別人口の推移のグラフを載せています。赤い線が65歳以上、紺の線が年少人口の比率ですが、平成7年のところまでは年少人口の比率の方が多かったのですが、平成7年以降は逆転をして65歳以上の人口の比率が多くなってきていることを示しています。それからその右の松江市の現在の人口の状況ですが、自然動態、これは出生数と死亡数を表しています。出生数は、紺の色で示していますようにだんだん減ってきています。ただ、このところは、松江市の子育て施策も功を奏して維持をしているところです。一方で高齢化もあり、死亡数は増えてきています。平成16年のあたりから出生数と死亡数が逆転しています。要するに自然減、自然に減少していく状況になっていることが分かります。その下のところですが、これは合計特殊出生率です。これを見ていただきますと、島根県、松江市共に全国の合計特殊出生率よりも高いところを維持しているということを表しています。次を捲っていただきますと、松江市の社会動態を表しています。オレンジ色が転入者、青い色が転出者です。これまでも転入が多かったり、転出が多かったり、景気の動向に合わせて動いているところで

すが、最近のところは青い棒の方が上回っている。要するに転出の方が上回っていますので、社会的にも減っているということです。もう1つ注目すべきが、全体のグラフの棒の長さが短くなっているということです。転入転出についても全体的に動きが少なくなってきたということがこれで分かります。そしてその下の松江市の年齢別移動理由ですが、この中で特に目立つのが、20歳から24歳ぐらいのところでは赤い棒が下に下がっているということです。要するにこれが就職によって松江市から出ていく人。その次の25歳から29歳のところにもあるのですが、このところでは一気に流出しているということがお分かりいただけると思います。65歳以上のところでは、退職して帰って来られるのかと思えば、逆に退職されて転出されている傾向があることが分かります。その右のグラフでは男女別の産業人口を表しています。この中で特に突出しているのが、医療、福祉に従事する女性の就業者の割合が非常に高いということです。松江市の女性は、医療、福祉分野に就職している方が非常に多いということです。そして、その下が人口ピラミッドです。現在の状況が左で、これを何もしないまま国の推計でいきますと、右のような非常に不安定な、細いつ倒れてしまうかというような状況になってしまうということが予想されています。それを捲っていただきまして、その右ページの下のところでは、そこに松江市の人口ピラミッドの変化ということをつけていますが、左が現状2010年です。これを2060年には上から下まで均等に人がいるという理想に近い形にもっていかなければならない。中々難しいことだと思いますが、こういった理想形に向かっていきたいということです。次を捲っていただきまして、それに向かってはどういうことをしたらよいかというを計算しますと、出生数で年2,000人を目指したい。現在約1,800人くらいですので、これを2,000人にしたいということです。それから、社会増、流入ですね。これは年270人を目指したい。これをやってようやく2060年に約18万人、1割減の状態になるということです。非常に高いハードルではありますが、こういう目標を掲げたところです。

そこからが総合戦略ですが、先ほども申し上げましたように、出生数年間2,000人と社会増年間270人、これを2つの挑戦と掲げたところです。この目標に向かい、5つの基本目標、10の重点プロジェクトを作りました。特に5つの基本目標ですが、この中では、とにかく安定した雇用を創出するという。それから、松江の魅力に磨きを掛け、新しい人の流れをつくるということ。こちらに来てもらうということ。まちを挙げて結婚・出産・子育てを応援して若い世代の希望をかなえていくということ。安全・安心な

まちづくりをしていくということ。そして松江市で特に特徴的なのがこの5番目の、中海・宍道湖・大山圏域の連携強化によって日本海側の拠点になるようなまちをつくっていくということです。県都といえども20万人の都市です。これを鳥取県の境港市、米子市、島根県の安来市、出雲市の5市と大山圏域を含めると、今66万人の人口があります。日本海側では、新潟圏域、金沢圏域に次ぐ人口規模を持っています。この大きなスケールで地方創生を目指していかなければ、小さい都市だけがそれぞれでやっても難しいのではないかとということで、松江市と圏域の5都市が全てこの5番目を目標に掲げています。そして、その目標に向かって10の重点プロジェクトを挙げたところです。特に、この中で5番目のところには「ふるさと人材育成・学力向上プロジェクト」という教育と直結したプロジェクトを掲げています。こういったことを目指し、本書にはできるだけ数値目標を立てて事業を行っていく。それも、先ほど市長も申し上げましたが、市民運動として、市民皆でこの危機感を共有して立ち向かっていこうと考えています。特にこの戦略は、各界と市民の皆様の意見を取りまとめる形で作成作業を進めてきました。そして、外部の委員で構成する推進会議をもったところですが、この中に教育界からは松江市のPTA連合会の方から参加いただいています。その中でいろいろな貴重なご意見をいただきましたが、市PTA連合会の方からは、人口減少の問題や地方創生の取組について是非子どもたちにも話をしてもらえないかということと、保護者の皆さんにもそういった話を共有していかなければならないというお話をいただきました。そこで、この総合戦略について、教育委員会学校教育課と一緒に、小学生、中学生の子どもたち向けの資料を作成しているところです。いずれ授業の中で活用していただければと考えています。さらには、教職員の皆さんにも同じように地方創生の意識を持っていただければと思っています。

説明は、以上です。

○松浦市長

それでは、ただ今事務局から説明のありました地方創生と教育という問題について、皆さんと話し合いをしたいと思います。

今回の地方創生というのは、なぜこういったことをやらなければならないかという、そもそもの根本のところあまり議論されていないような感じもします。例えば、日本の人口は、明治の初めまでは3,000万人とされています。それが、この150年の間に

4倍以上という急激な人口増になっています。それが、松江をはじめとした日本の国力を高めていくことに貢献したことは事実だと思いますが、果たして今、人口が減りつつあるということが何か病的な問題なのか、あるいは元に戻ろうとしているのかはよく分からないところがあります。私自身も、この地方創生の議論というのは、どちらかというところと経済界なり、そういったものの立場からの議論が多く出ているような感じがしていますが、むしろ子どもの人生や人生の目的が何なのかというところから、まず教育という立場からもう少し人口減少を掘り下げて考えていただくと、議論も深まるものと思っていますので、忌憚のないご意見をお願いします。

結局、明治以来どんどん東京へ東京へとお金や人を集めて、その効果として富国強兵が成りましたが、そうしたもののために、立身出世を目指すとか、故郷に錦を飾るとかという美談みたいなものが語られてきたというところがあり、そのことが今になって、逆に人口減少の原因になってきているわけです。教育というのは当然、子どもの幸せであったり、充実した人生を歩むという点では昔も今も変わっていないと思いますが、もう少し掘り下げて、その辺りの教育をこれから子どもたちにしていく場合に、今の東京へどんどん出ていくという価値観を、それで本当によいのかどうかという問題があると思います。我々としては、それに対応していけるように学力を子どもたちに身に付けさせるようにしているが、これからの教育あるいは家庭の中での教育をどのように考えたらよいのか、ざっくばらんにご意見をいただくようお願いします。

○清水教育長

家庭での教育ということで市長から話があったが、私は2人兄弟で、一つ上の兄がいます。2人とも都会の方の学校を出ています。40年以上も前の話ですが、就職の段になって、兄が浪人したために卒業年が一緒だったのですが、実は2人とも都会の会社に就職が決まっていまして、大学4年の秋に親に電話をしてそのことを話したところ、さみしそうな口調でした。それで、冬休みに帰った時に、「お前たち2人のうち1人が帰ってくると・・・」と言われました。さみしいのかなという気持ちがあったので、男気ではないですが、私が帰ろうということで、たまたま市役所の試験があったので受けてたまたま受かったのですが、当時は、親の思いとか家の縛りがあったように思っています。そうして、「兄は都会に勤めて、私は帰るよ」という話をすると、親はうれしそうな顔をしました。今は親と子の絆が少し薄れているといいですか、論語や儒教の世界でもない

のですが、そういったことをもう少し家庭の中で親と子がよく話し合っていくということが、教育の前に必要ではないかなと思っています。

教育で言いますと、市の教育委員会は義務教育が中心で、松江には女子高もあります。そうすると、義務教育の上にはまず高校があって、専門学校もあって大学もあるということで、社会に出るにはかなり時間がかかるわけです。その辺りで子どもたちに何を教えていくかということで、一番基本になるキャリア教育あるいはふるさと教育が出てきます。キャリア教育について私も調べてみました。平成11年の中教審の中で出てきますので、この言葉を使いだしてからまだ15～16年ということだそうです。時代がだんだん変わっていく中で、生きる力、自立を目指した力を子どもたちにつけていくんだということで、中央教育審議会が出てきたということです。このことを義務教育の時期に子どもたちに徹底的に教えていく必要があると考えています。

人間性を養うこととか健康のこと、体力のことをきちんと教える。あるいは、総合戦略の10の重点プロジェクトに入れていますが、学力を含めたキャリア教育という幅広い概念ですから、このキャリア教育を徹底していくということがやはり必要だと思っています。そして、それと並行してやっているのがふるさと教育です。子どもたちに松江に愛着を持たせるということを教育の中にシステム化して取り入れてきちんと教えていくということ。子どもたちが自ら考えて、自らふるさとを想ってくれる気持ちを養うこと。これが一番重要ではないかと思っています。成果が出るには時間がかかると思いますが、このことをこれからも徹底してやっていきたいと思っています。

○松浦市長

ふるさと教育なりキャリア教育ということが一番大事なのですけれども、定住なり、悪い言葉でいえば子どもをこちらに縛り付けるために言われているような感じが無きにしても非ずなので、ふるさと教育にしてもキャリア教育にしても、教育の目的というか家庭のあり方というものを踏まえて考えていく必要があると思います。

これは感覚的な問題ですが、最近の日本は、すぐ昔のことを忘れてしまって新しいものばかりに飛びついていくという、経済万能というか経済優先みたいなところがあるのかもしれない。そのことで返って日本の方向性とかそういったものが非常に軽いものに見られているというか、そういったところがちょっとあるような気がします。やはりもう少し日本の誇りであるとか、誇りという言い方はおかしいのですが、日本人として

どう生きるべきかというようなことを、歴史を振り返ってその土台に立って自分の生き方を考えてみるということももっとあっていいのではないかという感じがして、その中から学校教育というのも出てくるべきではないかと思ったりもします。

○多々納委員

教育の目的から申しますと、自己実現とか人格の形成ということが一番大きな目的としています。そういう中で、今ここで課題となっている人口減少については、「そういう方向にあるから地元に戻って来い」ということは教育としては言いにくいことです。就学や就職で県外へ転出しても、自分のふるさとである松江に魅力があるから松江で生活したいとか、その魅力を高めなければ、人口減少だから云々かんぬんということは通じないと思います。

それから、先ほどの事務局の説明から、やはり「就職」ということがキーポイントになっているのだと改めて感じました。先般頂戴しました資料5の学生アンケート結果の13ページですが、「仕事を選ぶ上で重視したいこと」で、「やりたいことに取り組む」ということが一番高くなっていますし、それから8ページには「現在の学校を卒業した後の進路」で、「市外に進学・就職したい」という人がダントツで多くなっています。若い人の気持ちはいつの時代でもきつとこういうことがあったと思うのですが、私たちの時代ですと、仮にそういう気持ちであっても、女の子だから地元に残れとか、あるいは経済的な理由で地元に残れと言われたときに、やはり親の意向に沿ってそういう生き方をしたと思います。しかし今の若い人や保護者の方を見ると、保護者の方たちが若い人の生き方を尊重して、無理矢理地元に残れとか、この人と結婚しろとかということはほとんど言われないうちに思います。私は大学に勤務しておりますが、若い人たちに就職・結婚に際して「お父さんお母さんが反対されなかった？」というようなことを聞くと、全くそうではなくむしろ勧めてくれたと。そういう家庭の状況ですから、親は希望があっても、そのことを今の親御さんたちは娘息子には直接的には中々言われないうのではないか。やりたいことがあったらむしろ応援するというスタンスの方が多いいのではないかと思います。

そうするとやはり、若い人たちが仮に自分の力をアップするために県外に出ても、松江は良いところだから松江に戻って来ようという気持ちを起こさせるような、ふるさと教育やキャリア教育が必要ではないかと思います。

特に若いときは押し付けられると余計に反発する傾向があるので、そのことを考えると、今日頂戴しました資料の5つの基本目標で、やはり松江の魅力に磨きをかけるとか、時代に合ったまちづくり、あるいは、若いときはあまり結婚や出産は意識していなくて、地元で自分の希望を叶える仕事があるというのが大きな要因になると思いますので、仕事の創生ということも含めて取り組めばいいのではないかと思います。

教育委員会としては、やはり子どもたちに学力をしっかりつけるということを粛々と進めていきたいと思っております。

○伊藤委員

最初に話させていただきたいのは、やはり「教育」はどういうことを目指すのかということですね。

島根県の教育の実態で、世間の言葉として厳しい指摘をいただいたことがございました。もっとも島根に残る教育をしてはどうかと。島根は人材排出県だと。教育で高校生まで育てて、全部大都市へ排出している。一体何のために高校教育まで頑張ったのかというような指摘もいただいたことがありました。ただ私たちは、やはり世界に羽ばたく子どもを育てていきたい。それから、地元の将来担ってやろうという気概があるような子どもも育てる必要がある。その点が、全日制の普通高校や専門高校の役割にあるのではないかと思います。

島根大学の副学長と教育学部長とお話ししたことがございました。最近は島根大学も県内の学生も増えているというようなことをおっしゃいました。それが正しいかどうかは多々納先生にまた伺っていただきたいと思います。一時は半分以下が県内の学生で、島根県出身の学生は少ないということでした。先ほど頂いた資料のグラフを見ると、大学へ出るときに転出者がグンと増えている。それから就職のときに更に極端に増えている。少し脱線しますが、去年の成人式での話です。今の世代はバブル崩壊後に育った世代であって、親世代は高度成長時代の「消費は美德だ」という世代なのですが、今の成人を迎えた子どもは贅沢という感覚が親と違っている。車も無理に持つ必要はない、家も適当に住めればいいというような、どちらかという節約・儉約の意識で育っている。そのことが、島根大学へ進学する学生の意識が、都会都会と言わなくてもこれこれを目指すのであれば島根大学出て、地元で何か自分の就職する道を見つける方法はないかと考えるようになったことへつながっているのではないかと思います。

そこで、市長がおっしゃいましたように、やはり子どもたち自身に考えさせるきっかけをつくっていく必要があるのではないかと思います。教育の場では、〇〇教育、〇〇教育というのがいっぱいありますが、高校生が選挙権を与えられる時代になりましたので、島根のために自分が将来どんなことができるのか、どんなことがしたいのか。世界へ羽ばたいて外からふるさと島根を見てくれてもいいし、地元に残ってこういうことをやってみたいという視点でもいいです。高校生で大学へ進学するとき、それから就職を目指すときに、島根や松江のために自分がどういうことができるのか、どんなことがしたいのか、自らが地元のために考えてみる機会をちょっと与えてみるということを教育の場のどこかで作っていったらどうかと思います。

○松浦市長

今のお話は多々納先生のお話との関連が非常に強いと思います。やはり子どもに、地元に残ってみたいとか、そういうことをきちんと考えさせると。そのときに、やはり松江をもっと魅力のあるものにしていく、あるいは教育をもっとそういった形で進めていくという、そういうような気がします。

○多々納委員

今、伊藤委員から島大に対してのお話がありましたので、私の分かる範囲でお答えしたいと思います。島根大学には5つの学部があり、学部によって入学の時点から県内の出身者の割合が大きく違ってきます。教育学部は目的学部で、やはり島根の教員になりたいという高校生が入っていきますので、入学時点で6割・7割の人が島根県出身者です。その割合がここところちょっと増えてきています。その正反対が総合理工学部で、そちらは県外出身者がほとんどです。県外から島根に来て学んで、また県外へ戻っていくという傾向です。やはり島根大学も地方創生というか地域に貢献したいということで、来年度から「ふるさと入試」ということを実施する計画です。入試の段階から、島根県の出身者で地元で学びたい、また地元に戻るという学生の枠を作って、各学部そんなにたくさんではないのですが、来年度に向けて準備をしているところです。

○布野委員

人口減少に突入し、少子高齢化とともに今後どういう時代がくるのかなということを

思っていますが、今こそ知恵を絞っていかなければならないときだと思えます。

以前頂いていた資料を見ますと、高校生などにもアンケートという形で協力を得ています。そして若い世代の人たちの意見が大変反映されています。女子高なども地域を見つめる観光甲子園への参加や、他の高校でも高校生の目線で地域の課題から解決策を見出す地域課題研究などが行われ、若い発想でおもしろい意見がたくさん出ていますので、こういった意見も行政に届けられるといいなと思えます。

先ほどから出ていますが、やはり今後は、学生のふるさと教育やキャリア教育が大変鍵を握ってくると思えます。島根県には大学や企業などが少ないため、進学・就職で県外に出ていくことが多いと思えます。外から島根県や松江を見ると、住んでいた頃には見えなかったものが見えたりします。そして、小さい頃から地域愛を育てる教育ができればなと思えます。いったんは県外を出るかもしれませんが、いつか帰って来てもらえるまちになればと思えます。

地域愛を育てるということに関連し、身近なところでは、松江の食材を使って高校生とコンビニとのコラボでスイーツの商品化や、高校生がおもてなしメニューを考案したなどということを最近よく耳にします。学生にとって、成功体験ではないですが、自分の意見が形になったり意見が取り入れられると大変な喜びだと思えます。また小学生や中学生には、世の中を見据えるとなると難しいかもしれませんが、その年代なりの意見を持っていますので、何か社会への参加型、社会を良くするための企画、シチズンシップ教育みたいなものを取り入れていかなければならないかなと思えます。

最初に教育長がご自分の兄弟の体験を話されましたが、私も自分の子どもに、跡を取ってくれとか跡を継ぐといったようなことを今まで全く言ったことが無く、それに比べて主人は小さい頃から「後継ぎ」と言われ育ち、親の面倒を見るのが当たり前と思って育った。反面教師ではないのですが、子ども心に嫌だったので、自分の子どもには言いたくないというようなことを言っていました。しかし今後のことを考える時そういったことを人生の岐路に立つ選択のとき、大学に行く・就職するといった時期に、やはり親が少し話しておかなければいけなかったなと思っています。

○松浦市長

私も清水教育長と同じような経験があります。やはり就職をするときに、それまで自分はいろいろなことを自由に選べる立場だと思ってきていたのですが、いざ就職しよう

と試してみたときに、どうしてもというか自然に親のことが頭に浮かんでくるんですね。その当時はまだ親は若いので面倒を見るということはなかったのですが、段々親も年を取ってくる。そのときに、じゃあ一体誰がきちんと責任を持って面倒を見るのかということになると、全く考えていないところがあった。結局私は男の子1人だったので、昔から何となくプレッシャーを掛けられて育てられてきたのですが、やはりそのときに、自分の人生というのは全くの自由じゃないんだなど。でもそれが当たり前じゃないのかなど、そのときは思いました。全くの自由の白紙の中での人生設計ができるという人はまずいないのではないかな。もしもそういう人がいるとしたら、それは全く無責任な生き方なわけで。やはり何らかの自分の親との関わりを考えながら人生を考えていくということはあるのではないかなと思います。そしてそれは、小さい頃から教えなくても、親に対する愛情というか恩というか、そういうことを自然に考えていると思います。その辺りをどのようにしていくか。教育で表現するのは中々難しいところがありますけれど、そういった点が本当はどうなっているのか。例えば介護とか社会的何とかみたいな話になってくると、何となく子どもとしての責務とか、そっちに取って代わられるような気がします。それで良いのかというような感じも私は若干思っているのですが。

○櫻井委員

同じような話になるのですが、私自身の話です。学校は島根で高校まで行って、大学そして病院勤務で17・8年東京にいましたけれど、なぜこちらに帰ってきたのか。東京でもっとバリバリ急性期の医療とかやればよかったのかもしれない。やはり自分の家のこと。代々続いた家、家族を守るという意識が強かったので、ある程度東京で勉強したらこちらへ帰って来ようという気持ちがずっとありました。それは代々続いた家の中での自然の教育です。祖父や父や母にそういうことを言われて、それが一番大きかったと思います。ただ最近核家族化で家庭の形も随分変わってきたと思います。代々続けるなんていう家も少なくなってきていると思います。そういう基本的な大きな流れの中で、恐らく皆さんが都会を目指したりする。確かに都会は楽しいですし、やりたいことはいっぱいある。逆に、反対の我慢するということができなくなった人が多くなっていて、楽しいことに向かう子どもたちが増えてきているのではないかなと思います。そういう中でちょっと考えて、地域のために自分がどういう仕事ができるのだろうかということや、何を教育の中あるいは家庭の中で教えていく必要があるのではないかなど、自分の経験

からそう思います。

今回は「松江市まち・ひと・しごと創生」ということで、市長さんから「共創」、共に創るというお話がありましたが、これは市民挙げての非常に大きなプロジェクトだなと感じています。

私は平成の大合併のときに同じような経験をしております。合併後の松江をどう作っていくかといったときに、いろんな会議に参加させていただきました。「如何に住みやすい松江を作っていくか」ということが私のテーマとしてありました。今回のこのプロジェクトについても、2060年を目指した随分先の長いプロジェクトですが、是非市民の皆さんの参加の中で良い方向に向かっていくといいなと思います。

このプロジェクトの10の課題の中には教育も入っていると思います。地域の人口を如何に多くするかということについては、社会資本を充実させるということが非常に重要です。その中には当然、医療や介護、教育、自然が入っています。鳥取県出身の宇沢先生がいつも、基本的社会資源が大事なんだと、これを競争原理にさらすようなことをしたら地域が崩壊するというようなことをおっしゃっています。まさに教育もその中の大きな社会資源ということで、教育が充実していれば人も集まります。経済優先、都会優先ではなく、教育の質を上げる。学力向上については今回始まったばかりだと私は思っていますが、学力向上も含めて、人生の目標や生き方みたいなもの、心の持ち方、儒教などもそうですが、そういうことをもっと教育の現場でできれば良いと思います。山口県の小学生は必ず論語を読みます。200人で一緒に読むんです。ライオンズで萩の方の視察へ参加したときに、子どもたちが皆で論語を合唱するというのでしょうか、これはすばらしいなと思いました。そういう人の心みたいなところ、人間としてどう生きたらいいのかということを、もっと具体的に分かりやすく子どもに教育現場で教える仕組みをつくったらどうかと思います。

今回の問題については、日本創成会議の増田先生が「消滅する市町村」ということで発表されて、それがきっかけだと思います。国のプロジェクトとして始まったわけですが、ではこれまで国は何をしてきたかということ、結局東京一極集中ばかりを目指して、国の責任がすごく大きいと思います。だったら国がもっと具体的に動くべきだと思います。地方に異動するとか、そういうことも大事です。その中で我々は地方でどうしたらいいか悩んでいるわけです。ですから是非、国と地域・地方と一体となって、お金も絡むこともあるでしょうし、人の流れを如何に東京への流れを止めるかという大きな課題

もあるので、そういうところは国と連携を取りながらやっていくことが大事だと思います。

教育については、人の生き方というようなことをもっと具体的な形でやるべきだと思います。具体的に松江の一つの対策として、若者の定住ですとか、職場の問題も確かにありますが、松江には女子高があります。この女子高を全国発信で使っていくと良いと思います。全国から松江市の女子高に（人を集める）。島大もありますが、隠岐の海士町の高校がそういうことをしています。例えば、寮があって安心して教育が受けられる。しかも質の高い教育で大学受験も目指していける。全国の有名塾が入ってきて授業するとか。せっかく市立高校としてありますので、そういうようなことを女子高ももっと活用すべきではないかなと思っております。

○松浦市長

有難うございました。我々も確かに女子高の活用というのは大変興味のある話です。全国的にも市立の女子高は非常に減ってきていますので、逆に言うと減っているからこそ、そういう独自性みたいなものが出せるチャンスになるのかもしれないですね。

○多々納委員

女子高の件に関連して。前にいただいた資料3の「基本目標を実現するための具体的な取り組み一覧（案）」の5ページに、プロジェクトの中に新規事業として「女子高から一貫教育ができる短期大学等」ということで「女子高から一貫教育ができる短期大学等（または専攻科、専門学校）の新設」とあるのですが、新しい大学を創るというのは財政的にも厳しいのではないかと思うのですが、島根大学もありますので是非それをうまく活用していただきたいと思います。先ほど申しましたように、島大でも「ふるさと入試」が来年から始まりますし、現在も推薦入試も行っています。女子高からも推薦入試で合格されて活躍している出身者もおりますので、この辺りで「高大連携」という、地元にある高校と大学で、女子高の魅力化、島大の魅力化を求めるために、何か新しい方向を探っていただくとよいと思います。新設も良いのですが。県立大学の4年生化というのも中々厳しいという話をマスコミから聞きますので、その辺りを模索していただくといいのかなと思いました。

それからもう1点。櫻井委員がおっしゃいました東京の一極集中は国の大きな方向で

した。その尻拭いと言っではいけません、それを今私達が一生懸命やっているという状況であると感じないわけではないのです。しかし、そういう点で申しますと、参議院議員の選出を島根・鳥取を合わせて合区で1名選出するとか、JRの三江線の廃止というのは地方創生に逆向きの考え方で、政策だと思えます。県内であっても、松江市とは離れている地域のことですが、松江市にも大きな影響を及ぼすので、是非そのようなことがないように松江市としても強い要望を出していただけるとよいと思えます。

○松浦市長

この東京一極集中には、女性の動きと言いますか、そういうことが根底にあります。結局女性が子どもを産むということなのですが、今、東京一極集中を是正しようとしたときに、ほっておくと逆の動きが出てくる可能性がある。つまり、これから東京が団塊の世代を中心として急速に高齢化してくると、いわゆる介護施設などの需要がすごく増えてくる。そして、そこで働く人たちのかなりの部分を女性が占めてくると、逆に地方の方は高齢者が減っていくという時代に差し掛かろうとしていますので、そうするとそういった施設の女性たちがどんどん東京へ吸収されていく。そして今度は地方がますます人口が減っていく。単に女性の人口が減るだけではなく、子どもが生まれませんので若い世代も減っていく。じゃあ東京の人口がどんどん増えるかという、東京の女性の出生率は全国最下位ですので、今度はそれがまた人口減少に拍車をかけてしまうということにつながり、非常に悪循環になってしまう。

やはり、松江市として女子高を持っているという一つの強みというものを何らかの形で生かしていきたいというのがこの趣旨でして、別に短期大学を創るということが目的ということではなく、女子高に入った場合にある程度将来が見通せるように、まさにキャリア教育ということができると非常にいいなという思いがあります。

○伊藤委員

女性の働きということは私も感じています。市長と教育長のご自身の兄弟関係の話を伺いましたが、これから具体的に考えていくときにちょっと留意しておかなければならないことがあります。私たちの世代は、母親父親が祖父母の面倒を見ながら、時には嫁・舅姑の軋轢を目の当たりにしながら、それでもお父さんお母さんはじいちゃんばあちゃんの面倒を見ていたんだということを子どもが実感して育った時代だった。ところが、

言葉は悪いですが、じじばば抜きがいいというような核家族になったときに、子どもたちはその姿を見ていないわけです。親たちは核家族で世話をする者がいない方がいいんだというように育った世代と、自然に自分の親は面倒を見るものだという感覚で育った世代とでは社会的に大きなギャップがあって、教育一つでということは中々難しい。ただ最近では、余所のおじいちゃんおばあちゃんとの世代間交流というのを体験させているところもあります。

それと女性の働き口ということについて、私はやはり女性の応援をしなければならないと思います。日曜日の新聞の広告欄を見ますと、2面を使って病院関係の募集が出ています。医者のもとより看護師や理学療法士とか。都会の人は、都会へ出て核家族はいいなと思っていた時代が、高齢化を迎えてきてどうしようかと困っておられると思います。後をみるべき子どもさんも困っているだろう。そこで島根のこの資料のグラフを見ると、女性の働き口では医療福祉が非常に多い。この辺りを親も子どもも、現実として島根の実態はこうですよということを考えるチャンスを作っていく必要がある。お医者さんも足りないし看護師や福祉関係の人も足りない。じゃあ自分が島根・松江に残って何ができるかと考えたときに、このような女性を支援していく。これが出産・子育ても関わって、こういう皆さんを求めているんですよということを、これからもっともっと連携させていかないといけない。特に女性を支援していかなければならないということを実感として思っております。

○松浦市長

その辺りが若干伊藤先生の言われたことと国の動きが違ってしまっていて。実は松江の圏域というのはお年寄りが非常に住みやすい、介護にしても医療にしても全国の中でも充実した地域だと言われていています。逆に言いますと、東京なり他の地域は松江に比べると非常に劣っています。したがって、日本版の高齢者移住村のようなものをつくったらどうかということが全国40か所くらい挙げられていますが、その中の一つに松江市があります。我々としては実感としてあまりありませんが、現実にはそういう状態です。しかし、そうした形で宣伝していけば、女性の職場を増やしていくことは可能だと思います。

○櫻井委員

今の少子化とかいろんな状況は、おそらく小学校中学校のときに学ぶ機会が無いと思

います。高齢者の介護のことや看取りなどいわゆる「死」について、おそらく避けて通っているのではないのでしょうか。保健などでは既にあるかもしれませんが、教育現場で、命の大切さについてや高齢になるとどういうふうになるのかとか、さらに言えば、寝たきりにならないためには若いうちに運動や食事などはどうしたらよいか、そうしたことを学ぶ機会が無い。私はそれは教育現場での医療教育だと思います。もし60年先を見据えていくのであれば、今のうちからそうしたことが必要であると思います。老化する過程の中に、少子化対策があったり、心の成長も含めてですが、そういう教育機会が少ないのではないのでしょうか。

○多々納委員

高校の家庭科では高齢者の実態とか高齢者との関わりといった学習機会が無いことはないですが、家庭科自体の時間が少ないため、どれほどできるのかというところはありません。

○櫻井委員

例えば、糖尿病や高血圧も含め、中高年になってからこれは危ないぞと気づくのがほとんどです。そうでなくて、もっと若いうちから高齢化の問題とか健康の問題、生活習慣によっていろんな病気が起こるといったことも、今回の地方創生の視点では非常に大事だと思います。その中に、例えば健康な子どもを育てていくとか、そうしたベーシックなところをもっと教育していくというのがあると思います。

○松浦市長

核家族になると余計に、例えば自分のおじいさんなどが元気なうちからだんだん年取ってくる、弱ってくるという現象をあまり見たことがないかもしれませんね。

○櫻井委員

それと、以前は家で亡くなる方が多く、家族皆で一緒に死を看取るということがありましたが、今はほとんど会わないうちに病院で亡くなったり、行ってみたら既に亡くなっていたということが多いです。そういうことも基本的に今の全体の人口の流れに大きく影響している可能性があります。

○清水教育長

今、櫻井先生がおっしゃったことは、総合学習などいろんな形で取り上げてよいかもしれないですね。それともう一点、余談になりますが、櫻井先生が海士町の話がされたことに関して、実は10月の下旬に中国地区の教育長会がありまして、文科省からコミュニティ・スクールについての講演がありました。その講演の最後にこの歌を歌ってくださいと言われたのが「ふるさと」という曲でした。「うさぎ追いし・・・」から始まる曲ですが、最後のフレーズを少し変えて歌ってくださいと言われました。「志を果たしていつの日にか帰らん」というフレーズがありますが、これを海士町では「志を果たし“に”いつの日にか帰らん」というふうに歌いますと。志は果たしてから帰るのではなく、果たしに帰るのだと、このように海士町では歌っているようです。その文科省の専門官は特にこれがお気に入りだったようで、次の懇親会でもこの歌を歌ってくださいということでした。海士町ではこういう歌い方をしているということで中々面白いなと思ったので少し紹介してみました。

○松浦市長

確かに、一字違うだけで全くニュアンスが違って面白いですね。

○伊藤委員

今回、こうして総合教育会議で市長部局から全体に関わる提案をもらい、私たちが教育の立場からも関連性を持つてみることで非常に良い提案をしてもらったと思っています。

子どもの数が減ったため教員も減らさないということが総務省から言われ、突飛もないことだと思っています。私が校長のときは、子どもの数は3人がノルマだと言ってきました。現状の学校を維持するためには3人いないと、一人っ子だと当然中国も見直しをしていますし、2人では現状は保てないということで、PTAの会などでは3人がノルマだよという話をしてきました。私も孫が3人おります。松江市の義務教育段階の医療制度は非常に手厚くしてもらっていますが、3人目ということになるとまた問題が違います。そのあたりは福祉や医療との関係もありますが、総合的に3人目をどうするかということをもとにみると課題になってくると思います。そうでないと1人や2人では

中々人口が増えないと思います。ここの目標数値にも2,000人とありますが、子どもが増えないと夢のある松江市にならないと思いましたので、大変有り難かったですし、今後一緒になって検討していかなければならないと思いました。

○松浦市長

今度、県が保育料の補助という視点で、今までは国と同じ形で第3子を軽減していましたが、それを第2子、第1子まで少し広げようという話をしており、我々もそれにあたる程度乗っかって上乘せをしていこうと思っています。

松江で生まれ育った人はあまり他との比較ができないので当たり前のように思っていますが、転勤してきた方だとか、あるいは松江から出られた方にはやはり実感していただけるようです。

○伊藤委員

この間、宮崎県のとある小さい町がHPを出したら、Iターンの人の問い合わせがすごくあったようです。インターネットだと日本中世界中から見るできるので、HPなどを更新される際に、松江市は医療制度をこうしていますよというような、松江市は突出しているというようなことをPRされると、県外からの移住者も考えてくれるかもしれません。

○松浦市長

かなり前ですが、松江市が子育て支援について全国3位の評価を受けましたので、いろんなことをまた充実させてきていますが、確かにそういうのももっと宣伝しなければいけないですね。

○伊藤委員

今、若い人はインターネットをすごく見ているみたいですね。

○松浦市長

ふるさと納税などはどこに良いお土産があるか探したりしてるようですしね。

○布野委員

本も出ていますよね。

○松浦市長

教育長も話をされた「ふるさと」の3番目の歌詞ですが、明らかに立身出世みたいな、逆に言えば東京に人を集めるための宣伝の歌に昔からなっていたわけですが、その辺りは今の教育でもおじいさんから子ども、子どもから孫といった形で刷り込まれているのではないかという感じもして、逆に言うとそれに反する、例えば人生の生き方だとか、そうしたものが今の教育現場で打ち出されているのかどうかですね。もちろん多々納先生がおっしゃったようにここを非常に魅力のある場所にするというのは必要なのですが、何か他に、例えば子どもたちに、本当にここで人生を過ごそうだとか、そういう思いを抱かせるような教育がどうしたらできるのか。昔からの価値観が刷り込まれているため、一方でここは良いところですよと言うだけでは中々人の心の問題があるので、そこをどう変えるかというのは大事なところだと思います。なんとなく今の教育はその辺りを避けているというか、あまりそういう教育についての考え方は聞いたことありませんが、どうなのでしょう。

○多々納委員

両方ですよ。やはり今は国際化の時代で、しかも地域も重要という、グローバルとも言いますが、両面が必要だと思います。松江市もそうですが、島根県では地域を愛する、あるいは地域の方たちの関わりということでふるさと教育をされて10年以上になります。文科省はこここのところ各大学にも地域をということを急速に言い出しまして、学部を再編して地域に役立つ学部をということで、教育内容もそうですし学部そのものも地域貢献できるような学部をつくれということを半ば強制で、島根大学も準備をしているところです。

○松浦市長

私はもう少し、哲学というか心のところ、理屈を言わなくてもそうだというようなものが何かないかと思っています。そこが自然に子どもの心の中に入っていくと、非常によいと思いますが。

○多々納委員

今は転換点でないかと思います。今までは国際化ということで、清水教育長もおっしゃったように歌の中にも立身出世のことが盛り込まれていました。その価値観を変えていくということのスタートがこの地方創生のプランになると思いますので、それを汲み取って歌から何から教育も変えていかないといけないと思います。

○清水教育長

今は多様化しています。この歌の時代は多分 100 年以上前、明治です。日本が発展しようということで立身出世でしたが、今はいろんな価値観があって、それをまとめていくのは中々難しい時代ではあると思います。私などは、本当はデジタルよりアナログにもう少し戻すべきだと思いますが。そういったことが少し欠けているような気がします。

○松浦市長

何となく、例えば今でも先ほど櫻井先生が言われたように東京は非常に楽しいとか、テレビとか何から常に流れていますので、そういうことが刷り込まれているところはありますよね。それが、例えば松江にいても日本のためにとか世界を股にかけて自分の人生を燃焼できるような、そういう生き方ができるかという話が子どもたちに伝われば、東京へばかり出るといったことがなくなるのではないかと思います。

○櫻井委員

我々は医療の業界ですが、例えば島根大学医学部を卒業しても地域に残らないで皆都会の病院に研修医として行ってしまうということがあり、これを何とかするために県を挙げて様々な相談をしたり、魅力ある研修現場をつくったりということをやっており、年々残ってくれる先生は増えています。今年は 50 人近くの先生が地域に残ってくれて研修を受けています。研修は日赤や医大で行いますが、その先生方が今度また地域に残ってくれるということで、地域医療のために非常に良い状況です。

私は先ごろ秋田県に行ってきました。秋田県に医師会の勤務医の部会があり、そこで大学の医学部での教育の話聞いたときに、非常に充実していました。秋田に残る先生も非常に多く、また実践的な教育をされていて、個別教育も一人ひとりに丁寧に行っ

いました。なぜこうしたことが秋田でできているのかと思ったときに、おそらく秋田全体の教育能力が非常に高く、いつも学力テストでは小中とも全国一位ですが、その延長線上に医学部の教育があるような気がします。小中など非常にベーシックなところの教育レベルがさらにキャリア教育に影響を及ぼしており、また非常に丁寧に教育していただけるので、地元に残って頑張ろうという人も増え、こうした良い循環を全体でつくっていくということがあると思います。秋田市は30万人くらいの人口で、全体ではおそらく島根県より人口が少なく、日本一の高齢化の県です。島根県は2位か3位です。そういう中でこうした教育がきちんと行われていることに私はびっくりしました。島根県もそういう可能性が十分あると思っています。それはベーシックな小学校中学校での教育レベルから影響してくると思います。

○松浦市長

これは教育とは全然関係ない話ですが、フランスに出張したときに、フランスは原発が世界では一番主流になっているわけですが、それがどうしてなのかという話をいろいろ聞いてみました。非常にベーシックな部分で国をどういう形でつくりあげるかというところで、ドゴールが戦後言ったらしいですが、結局フランスは戦前ナチスに蹂躪されましたので、まずとにかく軍事的に独立しなければならない、様々な面で独立しなければならなかった。そのためには軍事はもちろんですが、もう一つはやはり農業、いわゆる食糧安保と言いますか、それをやらなければいけなかったわけです。それからもう一つがエネルギーを自前でということです。そういう独立国家としてのベーシックな部分での哲学というか、国是みたいなものをきちんとつくって、そこから様々な施策へ波及させているようなところがあって、フランスは今では出生率を2.0まで回復させており、国全体としてこういう国をつくっていくんだという共通のものがあるため、皆がそれに参加するということがあると思います。

今の日本はどうか分かりませんが、少なくともこの松江とか島根県で、そうしたベーシックな部分をつくっていくということが、確かに必要なのではないのでしょうか。

○多々納委員

地方創生や仕事という面で、女性への期待が非常に大きいということを私も思います。頂いたデータでも医療・福祉の職場で働いているのは女性が非常に多いということだし

た。お医者さんの世界でも女子学生が非常に多くて、妊娠・出産・結婚とかというときに非常にお困りということで、島根大学全体で男女共同参画、特に医学部はどうするかということで、様々な取組をして参りました。出産するのは女性ですので、やはり女性が仕事をしながら3人子どもを産むためにはそれなりの支援をいただかないと中々できないと思います。松江市が子育て環境日本一を目指して全国3位にもなったということで、女性が輝き働き続けるためには、女性自身の意識改革ももちろん大事ですが、相当の支援をしていただかないと働きながら3人の子ども産むというのは大変厳しいため、是非その辺りの男女共同参画というような視点もさらにお願ひしたいと思います。

○松浦市長

やはりそうしたコンセプトのなかでやっていかなければならないと思いますね。

○伊藤委員

事務局にお願ひしたいことですが、これから具体化していく中で、2060年に目標数値を設定している非常に長期的なものです。この総合戦略には異論はありませんが、私が懸念しているのは、2060年までといったときに、お金の問題もあるわけで、まず前期はこれだというような、ベーシックというお話もありましたが”松江市らしい”ところをピックアップしてやらないとできないことだと思います。その辺りの、前期はこれを取り組みます、後期はこれを取り組みます、といったものをしっかりと踏まえた具体の方向をつくっていただくと、市民の皆様も分かりやすいと思いますし、共有・共創できるのではないかと思います。

○松浦市長

これは実は標題でも第一次総合戦略とっておきまして、まず5年間やって、それも毎年PDCAサイクルといって結果に対してそれを反省しながらまたやっていくというやり方を取ろうと思っています。今伊藤委員がおっしゃったような話も、例えば今回スタートする施策の中でも、あまり効果がないということになれば切り捨てながら集約していくことになると思います。それから、これは340というとてつもない数ですが、実はこれには一つの事業に集約できるものが多く含まれていると思います。これからまさに共創の中で整備をしていかないといけないと思います。そうしないと、皆の意識も共有

できないと思います。

○伊藤委員

読み進めていく過程で5年間の計画だということは分かりましたが、標題では分かりにくいということでした。

○多々納委員

フランスの話ですが、フランスの出生率が約2.0ということで、なぜプラスに転じているのかという点をまた市長からお聞かせいただければよいと思います。

○松浦市長

結局、骨格になる部分を国が全面に出てやっているのですね。先ほど櫻井先生からもお話がありましたが、例えば職場で子どもが産まれるということで一時家庭に入りますよね。それから何年かして職場復帰したときに、その方が出産前に持っていたポストを必ず保障するということが法律でなっています。そうした形で、例えば何年か経って復帰したら浦島太郎みたいな、あるいは気持ちの上で疎外感を抱かないといった工夫というのがきちんとされているということだと思います。もっと平たく言えば「子どもを産んでくれてありがとう」といったことが全国民で共有されているということだと思います。先ほどの話でも松江市ということがありましたが、やはりもっと国が前面に出て、骨格になる部分はきちんとやらないと弾みがつかないと思います。

大変不手際ではありましたが、今日は様々な方面から意見をいただきまして有難うございました。私どももそれを酌んでやらなければならないと思いますし、教育委員会の方でも今日出た様々な意見を取り入れながらやっていただければと思います。

今日はどうも有難うございました。